

うか下等社會の幼兒の集る幼稚園などは、耳か
らのみ教ふるよりも、實際金魚を畜つたり、小鳥の
世話をしたり、種を蒔いたり、水をやつたりする
様な極美しい、やさしい仕事をさせて暴々しい、
残酷な性質を良い方に向けてやつたならば其子供
の爲ばかりか社會の爲めにも誠に好ましい結果が
あらはれるであらうと考へます。

君が代は千代もさざと天の戸や

後 成

出る月日のかぎりなければ

親馬鹿といふを讀み

ふみ子

第一卷第十號の家庭欄にヒツホホタモス、アイラ

ンド氏は親馬鹿と題して、左の……記されまし
た。

『此間母親が庭で何かして居つて、彼れ(五才
の男兒)が書いて居た躰のしれぬ繪をふみちら
したとかいつて、彼大に腹を立て、「折角書い
たものをお母さんが消してしまつた」といつて
泣き出して「御免なさいといひなさい」とせま
ります。そこで母親は知らなんだのだから、さ
う腹を立てるものではないと却て堪忍といふこ
とを教へようとします。遂に母を打つた(中略)
斯様な場合に母親が子供に訛をしたものであ
らうか。子供の道徳の最初は親に服従するにあ
るとかいへば、或は獨裁權をふるうて親に向つ
て、何だと叱りつけたものであらうか、はた堪
忍を教へたものであらうか。』
右のやうな場合に、皆さんは如何な風にしてい
らつしやいますか。私は一も二もなく阿母さんは

子供に向つて、一言詫びるべきものであると思ひます。私は日々子供と一しよに居りまして、時には、誤つて子供の足を踏むこともあります。また氣が付かないで、折角子供が骨折つて、こしらへて沙山などをこわすこともあります。斯様な時には自分のあやまりだの、不注意だのが、氣が付いて、あゝ、氣の毒であつたと思ひますと、おまはず、自然に、詫ひの言葉が出てまゐります。しかし、子供に詫をいたしました爲に輕蔑されたり威嚴をおとしたなといふ感を持つたことは、少しもありません。勿論人は足りないもので、時としては、人に對して、あやまりのあるは免れぬ事でありますから、其時にこれはすまぬと思ふのは、如何な人に對しても同し事で、子供に對しても、この通であらうと思ひます、ですから、子供に

でも自然に詫言の出る場合はいくらもございませう。そして、これは、阿母さんか、子供に示すよい手本でございます。

若し子供に詫をした爲に、子供か言ふことを聞かぬ様になつたといたしますならば、これは、詫をした爲に、いふ言をさかぬ様になつたのではありません、阿母さんなり、先生なり、子供の手本となるべき人か、子供に對して、詫をしなければならぬ様な不注意な事を、度々繰り返すからであります。

勿論、子供は従順でなければなりません、不條理な場合までも、獨裁權をふるうて、叱りつけるのは、不自然な壓制ではないかと思ひます。たとひ、子供は、一時、壓へつけられましても、決して、心服して居るのはありません。只不服な

がら、おそれて、だまつて居るのでありますから、
 形丈は従ふことは従ひますが、心服して居るので
 ありませんから、心はだんくくと反抗してまゐり
 ます。

阿母さんか子供に詫をしないで、只子供に勘
 をさせて、それで、勘を教へるといふことは、
 よい勘を教へる仕方ではありませんで、ほん
 うの勘を教へる場合は、外にいくらもあること
 なくもひます。しかし、阿母さんが、一度詫をし
 た後では勘をさせる様にすることが必要でござい
 ます。

右は私か阿母さんの詫といふことに付いて、考
 へたこととございませうか、皆さんの御教を仰ぐた
 めに述へて見ました。

今昔いろは料理

(番外)

石井泰次郎

初春の料理

一、子木板かまぼこ
 鱧或は小鯛などの、三枚にふるしたるを、小骨
 など能く取り去りて、麻布に包みて水氣を取り
 ぬにのせ庖丁の脊にてよくくたゝき、よく
 煉りて摺鉢に取り、鱧の身十五尾なれば焼鹽二
 匁五分、みりんのにきりたるを二勺堅魚のだし
 一勺程を入れ、能き程にすりて、杉板の薄さも
 のにて小さな羽子板を作り、夫れえ、さしみ
 庖丁にて塗り付け蒸籠に入れむすなり
 模様は紅にて好みになすべし、

一、子木の子鴨